

## 編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

第25号(第七巻 第一号)が予定通り発行です。今号から目次が2頁になりました。1頁に収めるのが窮屈になってしまったからです。現在、256頁。さあ、これでドンドン執筆者が増えても余裕です。七年目に入って、ますます元気に拡大してゆくことを願いつつ、次の区切り50号を目指します。

その時私は、75才を越えていることになります。やれる間は続けたいと思いますが、永遠は何事にもないので、編集者の次世代育てもスケジュールの内と考えて千葉編集員、大谷編集員の二人に尽力して貰っています。

いつも執筆してくださる方々には、季刊というペースの思いがけない早さを実感しておられるだろうなあと気遣いながら、感謝に堪えません。

マガジンからの発信が、どんな役割を果たしているのか、一口では言えませんし、決めつけたくもありません。時と共に、その意味が世の中に伝搬していつていることを、私は疑いなく信じています。様々な分野での人の営みを、短いニュース、情報としてではなく、じっくり書き込んだ記録として世の中に提示し、残し続けていきます。

まだ今は、何処かで起きていることを文字に記録しているニュアンスが強いでしょう。しかしやがてこのマガジン自体が、この時代の出来事そのものになってゆくのではないかと考えています。

今号から又、複数の新規執筆者が登場です。読者の皆さんも、ご自分のフィールドの記録者として、参加を検討されてはいかがですか？

### 編集員(チバ アキオ)

10年以上かかわっている職場が大きな節目を迎えた。重要ポストの職員配置が代わったのである。世代交代ともいえるが、少なくとも私が今まで思っ

ていたような世代交代ではないように感じている。現在、現場の日々のマネージメントをしているのは20代女性。そして、そのマネージメントのもとに動いているのが40代～60代のスタッフである。

これを可能にするのは「イジワル心」の払拭・打破である。自分がした苦労を他の人がしないのは腹が立つ！だから、私が苦労をさせてやる！まだ若いんだから私がしたような苦労を君がするのは当たり前だ！というような心の動きである。

こういったイジワル心を自分が持たないためには工夫がいるように感じている。イヤイヤしていること、我慢をしていることを自分が自分自身に増やさないという注意である。成長のためにも、仕事をしていくためにも、全くのゼロにはできないだろう。しかし、そういう気持ちがある中にもどくくらいあるのかを知っておくこと、このことには敏感でいるよう心掛けています。

現在、真ん中のポストを若い世代が担っている状況で、若い世代ががんばっているから自分たちも頑張ろう！若い子の役に立とう！自分も真ん中の苦労を知っているから、だからこそ足を引っ張らないようにしよう！という職場の雰囲気がある。職場を長期的にみてきた境遇のものからすると、この緩やかな良循環は、なかなか起こせることではない。多分私が一番骨身にしみて、わかっていることではないかと思う。

良循環は継続させる、この時には現状維持というのも、大切な選択になってくる状況である。とはいえ、あらゆる側面が良循環であるわけではなく、同じ土俵の隣りの幕では大切な「ゲーム」を同時に行っている。その時にはあらゆる事象を駆使し用いますよ。そんなことを感じながらの編集作業であった。

### 編集員(オオタニ タカシ)

今号から新連載4本がスタートします。その中の1本の執筆者ガヴィニオ重利子さんはスイスからの執筆者です。対人援助学マガジンでは、今まででも遠く海外から連載して下さっている方が複数おられます。浅野貴博さんの「Journey to my Ph.D.」はイギリスから、石田良子さんの「海の向こうを見てみ

れば」はマレーシアのクアラ Lumpur での執筆でした。遠く海外からでもメールに原稿を添付すれば、届くまでの手間も時間も、国内と何ら変わらない。これも Web マガジンの力です。ガヴィニオさんは、一時期同じ職場で同僚として働いた方。縁あって、10 数年を経てまた同じ舞台で一緒にできることを幸いに思っています。

## ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は  
[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

### マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4-3-8  
ランプラス二条御幸町4-0-2 仕事場D・A・N

## 対人援助学マガジン

### 通巻25号

第7巻 第一号

2016年6月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第26号は2016年9月15日

発刊の予定です。

原稿締切2016年8月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと・・・というのがあります)。多くの方達が連載 7 年目を迎えています(す)、書いていただけるよう設定します。ご希望

の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。まだ登場していない、対人援助領域からの参加を求めます。

## 対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1  
立命館大学大学院応用人間科学研究科内  
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

## 対人援助学会事務担当

### 入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1  
リファレンス内  
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

## 表紙の言葉

映画「陽のあたる場所」(1951)は、青春ドラマとして、苦く哀しい物語だ。石川達三著「青春の蹉跎」はこの映画の原作「アメリカの悲劇」の翻案小説らしい。日本映画「青春の蹉跎」も苦しい作品だった。

貧困からの脱出を望み、チャンスをつかみかけたとき、邪魔になる過去。妊娠したと訴え、追ってくる彼女を、男はポートに誘う。

私はこの映画のことを、家族療法学会誌の連載「連想映画館」に書いたことがある。イラストはその時使用したものに彩色したものだ。

いま又、貧困が時代の問題に上る。そうになると、こんな青年期の出来事も復活してくるのではないかと感じてしまう。

2016/05/25 団士郎

## 対人援助学会第8回年次大会(&第7回ヒューマンサービス研究会) (素案)

大会テーマ 「人間の尊厳と対人援助」

### 9月24日(土)

- 1 理事会 11:30~12:20 大教室 (昼食をとりながら開催)
  
- 2 基調講演 12:30~14:00 講堂  
東京大学名誉教授 村上陽一郎 「人間の尊厳と対人援助」(12:35~13:35)  
村上陽一郎氏へのインタビュー (インタビュアー: 本学・臼井正樹) (13:35~14:00)
  
- 3 研究報告 14:10~15:50 (20分×5報告: 2教室使用予定) (1教室は対人援助学会として使用し、もう1教室はヒューマンサービス研究会として使用。発表数が多い場合は、さらに教室を用意。)
  
- 4 企画ワークショップ1 (2教室使用)  
企画ワークショップ① 16:00~17:20  
企画ワークショップ② 16:00~17:20
  
- 5 会務総会 17:30~17:50 大教室
  
- 6 懇親会 18:00~19:00 食堂2階

### 9月25日(日)

- 1 ポスター発表 9:00~10:00 (多目的実習室 B (A406))
  
- 2 企画ワークショップ2 (2教室使用)  
企画ワークショップ③ 10:10~11:40  
企画ワークショップ④ 10:10~11:40
  
- 3 理事会企画シンポジウム 12:30~14:30 (大教室使用)
  
- 4 閉会 (理事会企画シンポジウムに引き続いて閉会)

(注)

- ① 9月24日(土)の基調講演、懇親会はヒューマンサービス研究会としてのプログラムとする。ただし、対人援助学会のメンバーも参加可能なプログラムとして整理する。(「基調講演」は、保健福祉大学としての公開講座を兼ねる予定)
- ② 9月24日の理事会については、参加者に対し昼食を用意。
- ③ 9月24日の研究報告は、ヒューマンサービス研究会、対人援助学会の関係者全体で10本を予定。報告数が想定と異なる場合には、使用教室数、時間帯等を修正。
- ④ 9月24日の懇親会は、一人2000円会費を想定。
- ⑤ 9月25日のポスター発表については、1時間で設定。ポスター発表が多く、前年と同様に1時間30分で設定する場合は、以降のプログラムを30分後へ移行。
- ⑥ 企画ワークショップは、24日2本、25日2本の計4本を想定。本数が増える場合は、会場を追加するか、その後のプログラムを繰り下げることにする。
- ⑦ 対人援助学会の参加受付は、研究報告以降の参加者に対して行う。

上記のような枠組みで開催案内を行い、研究報告者、ポスター発表者、企画ワークショップ参加者を募り、第8回年年次大会の準備をスタートさせることとしたい。

神奈川県立保健福祉大学 白井正樹